

AIYES 通信

横浜スペイン交流協会会報

1991年12月1日発行 第3号 発行・横浜スペイン交流協会事務局

桜の植樹計画が大きく前進！ ＝ロンダ・セビージャ・バレンシアに…＝

11月7日会長が駐日スペイン大使と面談。桜の植樹計画について協議した結果、ロンダ市から順次植樹していくことになり、計画の推進について大使の全面的な協力をいただけることになりました。これまで会長が各方面の関係者と折衝してきた結果、㈱日本桜の会その他関係者のご協力が得られることになり計画が大きく前進しました。これから計画の詳細を詰め、「桜の植樹キャンペーン」及び「植樹基金」の募集を開始することにしております。会員をはじめスペインに強い関心をお持ちの方々のご支援を期待しております。

【趣旨】日本とスペインは400年余にわたり友好関係を持ってきましたが、特に最近における両国の関係は緊密の一途をたどっており、スペインに在勤、在住する日本人あるいは留学、旅行する日本人が急増しております。申すまでもなく、政治的、経済的、文化的交流のいずれにおいても、人と人との太く強い絆があってこそ、それに支えられて発展していくものと考えます。

そこで、スペインに日本の桜を植樹し、これを日本とスペイン両国の友好親善のシンボルとして両国間の絆を太く強くし、市民相互の文化交流の末長い発展を期したいと考えております。スペインに植樹した日本の桜が大きく成長するほどに、日本とスペインとの市民相互の交流が深まり、両国の友好親善の発展を支えていくことになると確信しております。

【経過】1984年4月「横浜市港南区ひまわり親善国際交流協会」（下山会長は港南区長として深いかわりをもつ）はセビージャ市トリアナ区との文化交流を進めるため、代表団がセビージャ市長

及び区長を表敬訪問。その後、春田画伯（ロンダ市在住。名誉アンダルシア人）共々「セビージャ市とロンダ市に日本の桜を植樹しよう」との構想を描いたが、スペインにおける検疫等の受入れ態勢が難しい等のため、日の目を見ず。

＊ 1989年12月 春田画伯が来日した際、ロンダ市長からの「日本の桜の植樹要請書」を持参されこれを契機に「桜の植樹事業」構想が再浮上。

＊ 1990年6月 「ライオンズクラブ国際協会330複合地区ガバナー協議会」から「ロンダ市への桜植樹基金」100万円が日本マドリッド会に贈呈された。下山会長及び春田画伯が立ち会い、事業の実施まで保管中。

＊ 同年8月 「桜植樹事業」について、下山会長が駐日スペイン大使館商務部と情報交換。

＊ 1991年1月～4月 スペイン大使館から入手した「スペインにおける植物の検疫及び通関に関する法令」について、翻訳及び研究。

＊ 同年3月 スペインにおける受入れ態勢の整備等「桜の植樹事業」の促進について、下山会長及び植田副会長が駐日スペイン大使と懇談。

＊ 同年7月～10月 下山会長が各方面にわたり情報収集。㈱日本花の会その他関係者と折衝。

＊ 同年11月

下山会長が、駐日スペイン大使と面談。

「桜の植樹計画」について協議。



□会員紹介□

はじめまして、皆さん今日は！

紙面の都合で、1-2号で割愛しなければならなかった会員紹介を続けます。お待たせいたしました。

●大学時代、1ヵ月サラマンカ大学に留学した。また、10年前には、アメリカ南部のニュー・メキシコ州で生活する機会があった。そこには、スペイン語を話す人びとが多く住んでおり、スペイン文化圏への関心をさらに深めた。現在は、仕事を通じて中南米と関係が深い。趣味はギター。(杉本)

●20数年前、神田の古書店で幸田成友博士の著書との運命的な出会いをしたのが、わたしのライフワークを決定した。日本とスペインとの交流史である。以来なんどもスペインを訪問し、ビソに住んで古文書館巡りを続けている。かつては盛んだった南蛮学の伝統の火を守っていきたく思っている。スペインを去る時には、友人たちに「いつ帰ってくるのか？」といわれる今日このごろである。(飯塚)

●大学では、スペイン語を専攻し、これまで6回スペインに滞在している。6年前にロンドンへ。一昨年に帰国。万事控え目なイギリス人と対照的なのがスペイン人。ロンドンの地下鉄で傍若無人に騒いでいるのは、きまってスペイン人などのラテン系だし、食事のまずさを嘆くオペアもスペイン娘だった。翻訳などお手伝いをしたいし、有志の人びとと一緒にスペイン語の歴史・文学の翻訳

などもやってみたい。(小島)

●スペインとの関係は10数年になる。とくに最近3年半、ハンブルク・ミラノ在勤中は、仕事や休暇でしばしばスペインを訪れる機会があった。パエージャやアングラスなどスペイン料理の美味しさもさることながら、スペインの友人たちとの家族ぐるみの付き合いが忘れ難い。結婚式に招かれ楽しい一夜をすごしたりもした。今後も、心やさしいスペインの人びととの結びつきを大切にしていきたいと願っている。(田中)

●スペインは、16世紀には「日の沈むところなき」世界帝国となったが、その求心的な中央集権主義とともに、遠心的な地方分権主義を根強く残している多様性の国である。現在は、17の自治州に4つの公用語をもっている。わたしは、とくにガリシアとカタルーニアの言語文化に興味をもっている。昨年3月退職を契機に、大学のスペイン語科に入り、若い学生たちと一緒に勉強が続いている。(堤)

●イラストとデザインの仕事をしている。最近、アンダルシアを旅行し、白い町、カサレスの風景に強い印象を受けた。ロンダでは、春田画伯をお訪ねし、アトリエを見せていただいた。イラストなどでお役に立てればと思っている。(児玉)

サンタ・マリア号復元船

YOKOHAMAへ

1992年日本に回航される「サンタ・マリア号(復元船)」を是非横浜に寄港させたいとの多数の会員の熱い願いを背景に、関係機関に対し寄港誘致の働きかけをこの1年間にわたり続けてきた結果、実現の可能性が見えてきたと思います。今後も引き続き実現へ向けて努力することはもとより、協会としての歓迎行事等の企画を練っていきたくと考えています。会員の方々の多彩なアイディアをお待ちしています。



バルセロナ港にあるサンタ・マリア号復元船(日本へ来るものと同型)

故デル・カスティージョ元駐日大使の墓参 — スペイン大使館と当協会が共催 —

「日本を第二の故郷」とされていた故フランシスコ・ホセ・デル・カスティージョ元駐日スペイン大使を偲んでスペイン大使館、協会共催の墓参の集いが、命日の6月18日、横浜山手の外人墓地で厳粛に行なわれた。参列者は、アントニオ・デ・オヤルサバル駐日スペイン大使のほか、下山会長ら約30人のメンバー。

デル・カスティージョ大使は、戦前1935年から1938年までの4年間と、戦後1949年から1954年当地で亡くなるまでの5年間の2度に亘って、日本で勤務され親日家として知られていた。亡くなられた当時の新聞記事によると、告別ミサには、各宮家をはじめ主な政治家たちが参列しており、横浜外人墓地で行なわれた埋葬式には、生前親交のあった内山知事ら約100人が参加している。故大使は、当時横須賀にあった清泉女学院をしばしば訪れており、埋葬式には同学院の卒業生と生徒が10数名参列している。

6月18日の墓参に先立って、わたしたちは、故大使と親交のあった人びとからお話を伺おうと手分けして各方面にあたったが、そのほとんどが故人となっておられ、お会いすることができなかった。わたしたちの墓参は、没後初めてのものであり、せめて泉下の大使をお慰めできたのではないかと考えている。

墓参に先立ち、セント・ジョゼフ・インターナショナル・スクールで、高柳治子さんの進行で、アルカラ神父による追悼ミサが厳粛に行なわれた。

つづいて墓標の前に移動し、オヤルサバル大使は、赤と黄の縞のリボンをつけた花輪（リース）を、参列者ひとりひとりは白いカーネーションを墓前に捧げ、故人のご冥福をお祈りした。

墓参後、中華街の重慶飯店別館でオヤルサバル大使とアルカラ神父を囲んで、故デル・カスティージョ大使を偲ぶとともに、横浜とスペインとの今後の親善行事などについて語り合った。



左からアルカラ神父・オヤルサバル大使・下山会長

横浜外人墓地に眠るスペインの人びと

堤 依久男

幕末から明治にかけて、横浜には数多くの欧米人が訪れ、関内の居留地に住んだ。かれらは、貿易に従事し、また、欧米の優れた学問・技術を移転する懸け橋となり、日本の近代化に大きな役割を果たした。その中には、わたしたちの社会に深くコミットしここを終焉の地として選んだ人々も多かったし、また、志半ばにして逝った人々もあった。安政のはじめ、横浜港を俯瞰する山手にあった増徳院の境内に、外国人のための墓地がはじめて造られた。横浜外人墓地の濫觴である。

その後、現在に至る130年間に、拡張された外人墓地には4000人以上の外国人が埋葬されている。横浜外人墓地については、武内博の「横浜外人墓地」や生出恵哉の「横浜山手外人墓地」などの著書があるが、そのいずれにも、ここに埋葬されているスペイン人については、ほとんど触れられていない。

そこで、故デル・カスティージョ元駐日大使の墓参に因み、埋葬されているスペイン人について調査したいと考えた。墓地事務所の記録は、太平

洋戦争などで失われたものもあり、墓標との照合は困難な作業であった。炎天下汗を流しながら、寺原瑛子さんと一緒に、すでに摩滅した墓標についても判読を試みた。事務所の記録にはスペイン人と書かれていても、姓はさまざまで、スペイン系だけ

ではなく、オランダ系、イタリア系、スカンジナビア系、ポルトガル系などがある。碑文はスペイン語、ポルトガル語、英語、ラテン語などで書かれている。現段階で、かれらがすべてスペイン人だと断定することは妥当ではないだろう。

以下に、調査した合計31人の姓名と生年・没年を、列挙する。

I地区

1. フランシスコ・J・デル・カステージョ
スペイン大使
1901・7・27-1954・6・18
2. アベラストゥーレ, G (フリアン)
1926年没
3. エドムンド・J・ブラサ
1864・8・29-1898年没

IV地区

4. E・P・D・エミリオ・パストール・イ・デ・モーラ
1901年没

V地区

5. ラフィルネ・ハーン
1957年没

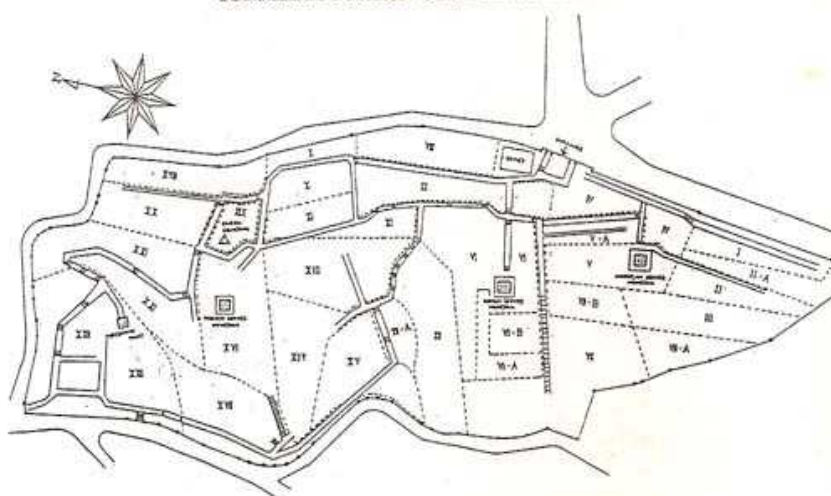
VI-B地区

6. ホセ・ムニョス・ベニナルペール
東京外国語大学教授
1887・10・14-1975・5・1

X地区

7. マヌエル・アリアス・イ・ロドリゲス
1850・9・17-1924・3・6

YOKOHAMA FOREIGN GENERAL CEMETERY



8. デ・カストロ, A・B
1919年没
9. マリビエロ, A・F
スペイン中央大学教授、日本・香港領事
1890年没
10. ノローニャ, D
1878年没
11. マリア・フィロメーナ
D・ノローニャの妻
1847・3・30-1874・3・4
12. レメディオス, M・E
1922年没
13. レメディオス, M・R
1932年没
14. ロドリゲス, M・A
1924年没

XI地区

15. バラダス, M
1893年没
16. ゴンサレス, D・J
1892年没
17. ゴンサレス, J・デ・ラ・クルス
1893年没
18. モントーヤ, サントス L
1975年没

XII地区

19. ジュゼッペ, P
1905年没

XIII地区

20. ダルメイダ, J・E
1902年没
21. ガルシア, J
1888年没
22. Sr. アメリア・レーフェンフェルト
1894-1975
23. ハコボ・マリアーノ
享年71歳、1921年5月1日没
24. オルティス, M
1921年没
25. オルティス, Jまたはヨハン・オルティス
1844・7・24-1918・3・28
26. フアン・ブラナス
1890・2・8-1838・6・25
27. キン・アンナ・ブラナス
1890・1・2-1968・6・12
28. マリアナ・ブラナス (Miss)
1914・4・4-1932・9・8

XVI地区

29. レオポルド, C
1920年没

VII-C地区

30. サンチェス, アニー
1972年没

XXII地区

31. デ・ソト, フランシスコ
1960年没

上記のうち、1. のデル・カステージョ元スペイン大使については、今回の協会の墓参によって一般に知られるようになったが、その他には、6. のホセ・ムニョス・ペニャルベル教授がよく知られている。墓所には、笠井鎮夫教授の手になる立派な墓銘碑が建てられている。ムニョス教授は、1911年文部省の招きで来日、1975年亡くなるまで64年間、スペイン語教育に尽くされた。日西文化交流に尽くしたその功績によって1966年には勲3等瑞宝章を受賞している。

残りの29人については、遺憾ながら、今回は十分な調査ができなかった。ご姻戚や知己の方から、故人の業績や横浜との係わり合いなどについて、お話を伺う機会があり、調査が続けられたらと考えている。ご連絡をお待ちします。

グループ活動活発化

前号の会報でお知らせしたグループ活動がよい軌道にのりはじめました。ここに、各グループの活動状況をお伝えしましょう。会員の皆様もふるってご参加下さい。

清水憲男教授講演 「遠くて近いスペイン」

翻訳・通訳グループ

「清水憲男先生（上智大学教授）を囲む会」（6月8日〈土〉3:00～5:00p.m. 産業貿易ホール404号室、参加者40名）が、翻訳・通訳グループ主催の第1回の行事だった。

77年からNHKスペイン語講座を担当されている先生にお話を伺いたいという声がかねてから会員の間にあったのが、先生が1年の予定でスペインに旅立たれる直前に実現した。

出席者の数が限られていたので、その貴重なお話をより広く会員の皆さんに知って頂くために、キー・ワードをまとめてみた。

●3年半のスペイン留学の結果、提出した学位論文の献辞は、日本語で「かくも遠くかくも近きわが両親に捧ぐ」とし、スペイン語の翻訳「A mis padres, tan lejos, tan cerca」を付けたものであった。今回の演題「遠くて近いスペイン」とは一脈通じる。万感の気持ちを込めると日本語にならざるをえない。外国人の場合も、いくら日本語が堪能でも、九九やお祈りを日本語で言える人はいない。

●日本ほど情報に恵まれた国は少ない。スペインからも北京経由で夜7時と9時にラジオのニュースを聴くことができる。日本人の知的な関心はきわめて高い。一方スペイン人の45.3%はまったく読書しないという。若者の5人に1人は読書好きという調査結果もある。スペインは一言で定義できない矛盾の国・多様性の国である。学べば学ば

ほどわけがわからなくなるが、決していやにはならない。

●日本におけるスペイン語の歴史は、きわめて浅い。古くは、1630年、マニラで日本語・スペイン語辞典が刊行されているが、学問としてのスペイン語が確立したのは1955年以降にすぎない。ドン・キホーテの全訳が完成したのは、1966年である。かつてはスペイン語を話せない教授がスペイン語の会話の本を出版するということも多かった。

●スペイン語に限らず語学をマスターすることは不可能に近い。例えば、「わたしの家の斜め前」とか「川は浅い」などをスペイン語で簡単にいえるか？ 話すためには機転をきかすことが大切。たどたどしくとも誤解のないように話す、上手でなくとも、よい言葉話すことを心がけたい。

●最近までは、日本文化がスペインに紹介された例は少ない。17世紀の小説に「日本人は東洋におけるスペイン人」という記述があるくらい。下っては1920年代、バルセロナでモダニズムが盛んなところ、新渡戸稲造の「武士道」が翻訳されたことがある。

●スペイン人は一般に、中南米に対して優越感をもっている。しかしスペイン語の将来を考えると、中南米のスペイン語も重要な要素である。

小島素子・堤依久男

暑い夏は冷たいスープで

スペイン料理を楽しむグループ

8月24日、石川町の「オリーブ」で、第1回スペイン料理を楽しむ会を開きました。出席者はスペイン人2名を含む23名。おいしい料理に会話もはずみ、皆で腕を組みながら「クラベリートス」を歌った時には、アンダルシアのバルにいるような雰囲気も感じられたように思いました。

当日のメニュー

ガスパーチョ(冷たいスープ)、スペイン風オムレツ、ムール貝のにんにく風味、マッシュルームのにんにく風味、自家製ソーセージ、スベアリブ、パエージャ、サングリア、コーヒー

ガスパーチョの作り方(4～5人前)

材料: 完熟トマト3つ、きゅうり2本、玉ねぎ半分、ピーマン2つ、水またはトマトジュース1リットル、パセリとにんにく少々、フ

ランスパン、オリーブオイル、酢、塩

1. トマトは皮をむき、たねをとり、小さく切る。
2. きゅうり、玉ねぎ、ピーマンも、小さく切る。
3. ミキサーに、1、2と水を入れてまわし、少しずつオリーブオイル大さじ2と酢大さじ1を加え、好みの濃度になるまでパンを入れる。
4. 塩で味をととのえ、冷たくひやす。

高柳 治子

スペイン旅行を2倍に楽しむ法

日西歴史研究グループ

10月から元清泉女子大学スペイン文学科主任教授佐久間正先生を講師にお迎えして(月1回第1土曜日原則)、「日本とスペインの交流史を学ぶ会」が始まり、盛況のうちに回を重ねています。

これまで(11月)は日本とスペインの関係に入る前の導入部として、16世紀の世界の動き、つまり大航海時代、コロンブス(スペイン名コロン)のアメリカ発見や、マゼランらの世界一周等の話でした。

スペインとポルトガルはデマルカシオン(領海区分)の協定により、世界を二つに分け、スペインは西回りポルトガルは東回りで勢力範囲をひろげて行きましたが、とうとう地球を半周したところでお互いがぶつかり合うことになります。

そんな中で日本はさてどちらの範囲なのか、お話はますますおもしろくなっています。

日本の側から見た南蛮文化の話は良く聞きますが、大航海時代のスペイン・ポルトガルの側から日本を眺めているというところに、今回の講演会の新鮮味があると思います。

今後はいよいよ日本が舞台となり、フランシスコ・ザビエルのキリスト教布教、少年遣欧使節、秀吉のフィリピンへの威嚇の書状をきっかけとした、日西国交の開始へと話がすすみます。

今からでもぜひこの講演会へ参加してみたいという方がおられましたら、日西歴史研究グループの担当者(飯塚または寺原)まで、ご連絡ください。

この講演会の開催は神奈川新聞にも紹介され、会員外の多くの方々も参加され、活気のあるものになっています。またスペイン旅行をご計画の方は事前にスペインと日本の関係史を学んで行かれると2倍に楽しい旅行ができるでしょう。

寺原 瑛子

投稿のページ

スペインの桜

桜川 洋子

マルベージャ在住のS氏夫妻、ロンダのM氏宅を1989年夏と1991年正月の2回訪問する機会を得た。初回到両氏がスペインに住まれた記念として世界に誇る日本の国花、桜を現地に植える活動をされていることを知り大いに共鳴したが桜苗木の病害の上陸を恐れて、日本からの苗木の輸入が出来ず、各方面にその打解策を求めているが見通しが立たぬということであった。帰国後私が関係している国際団体に伝えたところ、両氏とゆかり深い方も居られて、短時間の間に正式に桜植樹の支援をすることが決定し、具体策については両氏と関係役員に一任された。折しもバルセロナオリンピック開催を目前にして、スペイン政府も対外的に開放政策をとるようになったが、日本からの桜苗木の輸入の承認には至っていない。私共もそれなりの解決案を求め努力していたが、取材のため1990年春から翌年正月にかけて、急に渡西することになり準備を始めていたところ、“苗木が駄目なら種子では如何”と頭にひらめき、関係者に相談したところ“是非実行するように”とのことであった。出発の一ヵ月間に植物の専門家を訪ねて現地に合いそうな染井吉野と江戸彼岸桜を選んでいただき種苗会社に発注し植物検疫を受け出発の前夜やっと現物を受け取ってトランクに納め、ロンドン経由マドリードー泊マラガに至ったが、通関も無事通り抜けS氏のお宅で包を開くことが出来た。マルベージャでは市に交渉されて桜のための市有地が確保されていたが、整地管理等今後が大変であろう。M氏にも種子をお届けした。土地の名士である彼は地元の小学校の生徒に種子を分けて各家庭の庭に播いてもらった。ポスターも町中に貼った。その後なかなか発芽せずに両氏共苦心をされたが、発芽率1%程度ではあったものの大切に育てられた苗木は高さ1.5m程に成長したとの報が後に寄せられた。M氏からは細かい連絡がないが1992年春、日本からギタリスト数名が現地演奏会を開くのでその折植樹の記念碑の建

皆さんからの投稿お待ちしております！

立を予定されとの報があった。現在再度秋播き用の種子を送り挑戦すべく準備中である。間もなく桜のトンネルを取材することが出来ることを夢見ながら……。

愛しのマリー

高橋 巖夫

愛しのマリーといっても、女性のことはない。マドリードの愛称である。会員の皆さんは知っていると思うが、スペイン人はマドリ、またはマリーと言っている。

僕がマドリードの銀行で、トラベラー・チェックをペセタに交換に行った時、行員が「マリーにようこそ」と言って微笑で応対してくれた。一瞬、僕はマリーという言葉が理解できなかったが、その日マドリード在住の日本人の友人から、マリーはマドリードの愛称であることを知った。その後のいろんな場所でマリーという言葉を目にしたが、まさに親しみと郷愁をさそう愛称である。

マリーというスペイン人の音声は、不思議な旋律を聞くようだ。そんなイメージが、複雑な歴史を背負った首都マドリードを、私たちの心をとらえるのかも知れない。

マリーは首都にふさわしい生き生きした生活を感じさせる愛せる街である。

協会シンボル・マーク デザイン募集！

企画委員会では、会員の皆様から、当協会のシンボル・マークを募集しています。このマークは今後、当協会がいろいろな活動をしていく際に使用していくものです。

スマートで、ミナトヨコハマにふさわしいセンスあるマークをぜひ、あなたの手でお作り下さい。

締切り：1992年3月31日。

送り先：事務局

スペイン語 — 言葉・ことば・コトバ……

牛にまつわるお話

栗山由美子

スペイン語には日本語とその意味は違っていますが、殆ど同じ発音の単語や言い回しがいろいろあって楽しいものです。

スペインの方が「バカ、バカ」と話していても勿論それは「馬鹿者」の意味ではありません。バカ(vaca)とは雌牛のこと。ついで雄牛はトロ(toro)。マグロのトロではありませんよ。

ところで、スペイン語で「私は三浦です」と自己紹介するとどうなるでしょう。実は闘牛用の勢いある牛を指すミウラ(miura)という言葉があるので、スペインの方には勇ましい牛の姿が頭をよぎり、「この人強そう!」と思われるかもしれませんね。最後に、牛の鳴き声は「ムー、ムー(mu, mu)」。日本語の「モー」とはちょっと違います。それでは今回はこれでモーおしまい。

「いろ」の話

高柳 治子

「恋は水色」という歌がヒットした頃がありま

したね。色に対する印象は、国民性、文化その他の要素によって異なってくると思います。色からうけるイメージについて、スペインと日本のちがいをお話ししてみましょう。

青: azul

アンケート調査によると、日本人が一番好む色は青だそうです。青は空や海の色で、涼しさ、さやわかさ、静けさにつながります。スペイン語でも同じで、マイナスのイメージはありません。花嫁がウェディングドレスをまとう時、どこかに青色の物をつけると幸せになると言われています。その意味では、幸運をもたらす色でしょうか。el príncipe azul: (青い王子様) 理想の男性を意味します。sangre azul: (青い血) 貴族の生まれという意味です。なお日本語では、「青白い」という病的なイメージがありますが、スペイン語ではこの場合は azul ではなく pálido(淡い)を使います。たとえば Antonio se ha puesto pálido. (アントニオは青ざめた。) など。

初級スペイン語講習会へのお誘い

スペイン語を話しスペインとの絆をより深めたい! そんな声にお答えしようと講習会を只今計画中です。92年4月-9月(8月休み)全15回程度。1回90分。平日昼間。20名迄。会場・費用などの詳細未定。下記へお問い合わせください。

スペイン語研修グループ:

編集後記

協会の活動が、着実に軌道に乗ってきた。桜の植樹事業の見通しも明るい。横浜の桜を植える、みんなで、スペインへ出掛ける日が待たしい。Ni un dedo hace mano, ni una golondrina verano. (一本の指では手にならないし、一羽の燕では夏はこない) という諺がある。一つの事象から、結論を急ぐべきではないということであろう。会員ひとりひとりの積極的な参加によって、協会の事業全体をさらに盛り上げて行きたい。(堤)

スペイン料理 レストラン

EL MUNDO
エル・ムンド

○クリスマスディナータイム

12月24日(火) 18:00~20:00

21:00~23:00

12月25日(水) 18:00~20:00

ご予約はお早めにどうぞ!

X'マスディナーをエル・ムンド でお楽しみください。

X'マス スペシャル メニュー

スペインオリーブの取り合わせ

セラーノハム

活ススキの香草風味

ガルパンソーのスープ

タラとじゃがいもの天火焼き

のろ鹿のロースト

X'マスデザート

パン

コーヒー

7,000円(税込)



各種パーティーのご予約は

TEL 03(3311)0051

新宿区西新宿 2-3-3

◆事務局: 〒231 横浜市中区桜木町